

東日本大震災被害状況調査報告パート2

－亘理町から－

東北労災病院勤労者予防医療センター 宗像正徳



我々は、3月25日、震災発生2週間後に、亘理町を視察し、被災地の地理的な特徴、被災者の臨床的特徴、行政職員の過重労働、避難所における栄養状況等について報告した。今回、震災から6週間が経過した4月22日に再度、亘理町を訪問し、問題はどの程度改善されたのか、新たに生じた問題はなにかについて調査し、被災地支援の望ましい在り方について考察を加えた。

大幅に改善された避難所の医療、介護支援

前回、避難所にはインスリン依存型糖尿病、心不全、末期がんなど、医療支援を必要とする避難民が数多く運び込まれていること、加えて、インフルエンザやノロウイルスの感染により、避難所が半ば病院化していることを報告した。さらに、これらの避難所のケアにあたる行政保健師が疲労困憊状態にあり、早

写真1

各避難所における医療支援、介護支援日程表

	吉田小(長小・吉中・浜吉田西・北)317人				亘理小(一丁目～五丁目・高瀬町・幸町・高瀬)438人				亘理中(高瀬・幸町・福原田・津町・東原)383人				亘理高(吉田大人世帯)642人				遠隔小(荒浜小・荒浜中)270人				中公
	医療(午前中)	人数	看護	その他	医療	人数	看護	その他	医療(午後)	人数	看護	その他	医療	人数	看護	その他	医療	人数	看護	その他	
7 木	嵯草(多治見病院)	32	予防	結核予防会	結核				自衛隊	3	予防		自衛隊	8	予防		福井(県立病院)				予防
8 金	嵯草(多治見病院)		予防	結核予防会	結核				自衛隊				自衛隊		予防		福井(大学病院)				予防
9 土	嵯草(郡原市立)		予防	小島(14時～)					自衛隊		予防		自衛隊		予防		体(大学病院)				予防
10 日	嵯草(郡原市立)		予防	小島(17～20)					休		予防		休		予防		福井(敬愛病院)				予防
11 月	嵯草(市民病院)		予防	結核(医1、看1)	大分県1				嵯草(市民病院)		予防		福井(敬愛病院)		予防		仙台(14～16)				予防
12 火	嵯草(市民病院)		予防	結核(医1、看1)	大分県1				嵯草(市民病院)		予防		福井(社会保険)		予防		自衛隊9～				予防
13 水	嵯草(市民病院)		予防	結核(医1、看1)	大分県1				嵯草(市民病院)		予防		福井(社会保険)		予防		自衛隊9～				予防
14 木	嵯草(大塚病院)		予防	結核(医1、看1)	大分県1				嵯草(大塚病院)		予防		福井(県立病院)		予防		自衛隊9～				予防
15 金	嵯草(大塚病院)		予防	結核(医1、看1)	大分県1				嵯草(大塚病院)		予防		福井(県立病院)		予防		自衛隊9～				予防
16 土	嵯草(大塚病院)		予防	結核(医1、看1)	大分県1				嵯草(大塚病院)		予防		福井(小浜病院)	労災・予防			自衛隊9～				予防
17 日	嵯草(羽島病院)		予防	結核(医1、看1)	大分県1				嵯草(羽島病院)		予防		福井(小浜病院)	予防			自衛隊9～				予防
18 月	嵯草(羽島病院)		予防	結核(医1、看1)	大分県1				嵯草(羽島病院)		予防		福井(済生会)		予防		仙台(14～16)				予防
19 火	嵯草(羽島病院)		予防	結核(医1、看1)	大分県1				嵯草(羽島病院)		予防		福井(済生会)		予防		自衛隊9～				予防
20 水	嵯草(総合医療)			結核(医1、看1)	大分県1				嵯草(総合医療)				福井(大学病院)				自衛隊9～				
21 木	嵯草(総合医療)			結核(医1、看1)	大分県1				嵯草(総合医療)				福井(大学病院)				自衛隊9～				
22 金	嵯草(総合医療)			結核(医1、看1)	大分県1				嵯草(総合医療)				福井(県立病院)				自衛隊9～				
23 土	嵯草(多治見)			結核(医1、看1)	大分県1				嵯草(多治見)				福井(県立病院)	労災病院			自衛隊9～				
24 日	嵯草(多治見)			結核(医1、看1)	大分県1				嵯草(多治見)				福井(社会保険)				自衛隊9～				
25 月	嵯草(多治見)			結核(医1、看1)	大分県1				嵯草(多治見)				福井(社会保険)				仙台(14～16)				
26 火	嵯草			結核(医1、看1)	大分県1				嵯草				福井(小浜病院)				自衛隊9～				
27 水	嵯草			結核(医1、看1)	大分県1				嵯草				福井(小浜病院)				自衛隊9～				
28 木	嵯草			結核(医1、看1)	大分県1				嵯草				福井(済生会)				自衛隊9～				
29 金	嵯草			結核(医1、看1)	大分県1				嵯草				福井(済生会)				自衛隊9～				
30 土	嵯草			結核(医1、看1)	大分県1				嵯草				福井(大学病院)				自衛隊9～				

(6月まで)

・労災病院(保健師) 10時～18時
18 亘理高
20 吉田小
21 亘理中
17 亘理小・遠隔小

看護師 4/28～5/12
助産師 5/8～5/12
保健師 4/30～5/6

吉田小

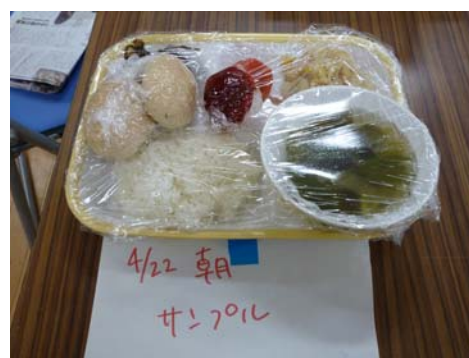
急の医療支援、介護支援が必要であることを指摘した。今回の調査では、避難所の医療支援、介護支援は大幅に改善していることがわかった。写真1は、4月22日段階で存在する5つの避難所の医療支援、介護支援体制を示す日程表である。5つの避難所すべてに、医療支援を行うグループと介護支援を行う保健師、看護師が常駐しており、避難者は、いつでも待たずに診療を受けられる。医師は岐阜県、福井県などから来られた方が多く、自衛隊、亶理町で例年健診を行う宮城県の結核予防協会などからも派遣されていた。看護を行う人材としては、東北労災病院のほか、大分、結核予防協会などから派遣されており、夜間の診療体制も整備されていた。全国からの支援により十分な医療、介護体制が構築され、医療面での問題はほぼ解決されているという印象をうけた。震災後間もなくの頃は、降圧薬を切らし、血圧が200mmHgを超えるような避難者がたくさんおり、脳卒中などの発症も見られたが、医療チームが各避難所に配置されてからは、適切な治療が行われ、血圧が200mmHgを超えるような避難者はいなくなった。また、前回指摘したような、問題となる感染症も現段階では発生していないとのことである。

避難者の食事、住環境

食事について、以前の訪問時は、糖質や脂質過剰で、タンパク質やビタミン、ミネラルが少なく、バランスが悪いことを報告した。この点については、宮城県のその他の地区の避難所でも同様の問題が指摘され、また、様々な栄養士の団体も避難所の食事の状況を調査し同様の問題提起をしていたが、この点についても、改善がみられている。たとえば、写真2は、4月22日の朝食のメニューである。ごはんまたはパンとジャム、わかめと野菜のスープ、肉と野菜のいためものなどがだされており、十分にバランスのとれた朝食であった。タンパク質、ビタミン、ミネラルを補給できる物資が普及していることが理解できた。栄養バランスをとるため、供給された物資を元に管理栄養士がメニューを考え、地域の母親たちが調理するということがあった。学校が始まり、母親たちは子供たちに朝食を食べさせて、送り出さなくてはならない状況になっている。避難所前には仮設ではあるが立派なキッチンが立てられ、ここで、母親たちが、順番で朝食を作り、子供たち

写真2

避難所の朝食のサンプル



にたべさせて学校に送り出しているとのことである。班長のお話では、避難所は地域ごとにまとめ、さらに、避難所となっている体育館内でも近隣地区同士でまとめていることから、このような共同作業も円滑に行えているとのことであり、とても重要な取り組みと思われた。

全体として改善している食環境の中で、やや困惑している事項として班長が指摘したのが「菓子パンの過剰な供給」である。炭水化物は十分供給されるなかで、毎朝、大量の菓子パンが届けられる。菓子パンは賞味期限が短いので朝食にたべてもらったり、日中出かけないお年寄りにおやつとして食べてもらったりしているが、こんなに毎日菓子パンを食べさせて大丈夫であろうかとの問いがあった。もちろん答えはノーである。菓子パンは糖分、脂肪分が多く、インスリン分泌能が低下した高齢者では容易に糖尿病を起こしてしまう。おそらく、味の無い食パンなどよりおいしい菓子パンを届けたいという善意の行動と思われるが、避難所側としては、主食がわりにできる普通の食パンのほうが実用性が高いのでありがたい。また、フランスパンのように固いパンも、高齢者は噛めない、あるいは歯を折る危険性があるので避けていただければとのことであった。

住環境については、4月になり、外気温が上昇してきたこと、さらに温風を送り出す大きな扇風機のような装置が設置されたことから、避難所となっている体育館内は暖かく、寒冷ストレスは多いに改善されていた。また、理学療法士の団体によるマッサージサービスやエコノミー症候群予防のための運動指導、美容師の団体による髪切りのサービスなどが行われ、避難所にやすらぎと喜びを与えていた。

通常業務を開始した行政職員

避難所における医、食、住環境の一応の安定化を得たことから、行政職員も本来の通常業務を開始している。本震に加え度重なる余震で役場の壁は崩れ、ガラスは割れ、本庁舎は危険な状態でもちろん中で作業はできない。縦長の仮設住宅に各課が並び、忙しく業務を行っていた。震災により崩壊した町の立て直し、がれきの除去、防疫、罹災証明の発行など、仕事は倍増している。過労死研究の直接の窓口である保健福祉課の保健師とも話をする事ができた。今年は大災害があったので、住民の健康状況が悪化している可能性がある。健診受診者をできるだけ多くし、住

仮設庁舎内の互理町職員



民の健康状況を把握し、適切に対処していききたいとのことである。また、地域の中小企業などが被災し、健診を推進する余力がなくなっている可能性があることから、保険者ごとに健診を分けることはしないで、町が主体となりできるだけ多くの住民の健診を行うようにしたいし、厚生労働省からもそのような指導があったとのこと。労災病院との共同研究で測定している尿微量アルブミンをそのような方も含めて測定したいがいかがかという問い合わせがあった。このような未曾有の大災害が一般住民の健康にどのような影響を与えるかは極めて重要な課題であり、住民の健康把握、健康向上にむけて是非多くの住民で尿アルブミン測定を利用して頂きたい旨をお話した。

このように、序々に正常化に向かいつつある行政業務であるが、一方で34才の女性職員が、震災後、業務中に脳梗塞を発症し、入院治療中であるといういたましい話を聞いた。二児の母親であり、職場はもちろん家庭にとって大きな痛手であったことは容易に想像できる。だれもが過重労働の中で、一人だけ働かないわけにはいかない状況での発症である。「いままで経験したことのないようなストレス状況での業務」が確かに脳、心臓疾患リスクを上昇させることが改めて示された。今回の災害では、各地区の行政職員の多くが過重なストレス状況での業務を余儀なくされていると思われる。それに伴う脳、心臓疾患発症がかなり増加している可能性があり、その実態調査が重要と思われる。

我々は、機構内の事務職員を対象とし、別途実施している「過重労働が健康障害を起こす機序の解明に関する研究」で、今回の震災後に追加で検査を行うこととした。東北や鹿島労災など東北、北関東の労災病院職員は「いままで経験したことのないようなストレス状況での業務」に関わったことから、過重労働がどのように身体機能に影響するかを調査する上ではきわめて貴重な状況と判断されたからである。研究協力者の皆様には、忙しく疲労が蓄積したなかで大変ご足労をおかけしたと思うが、必ずや貴重な成果が生まれると考えている。

存在感をます自衛隊の活動

自衛隊が雨や雪が降る中、あるいは放射線汚染が広がる中、がれきの除去や行方不明者の捜索など、大変な業務に従事していることは連日報道されているが、避難所においても彼らは重要な働きをしている。すでに述べた医療班の活動のほか、暖かい食べ物の炊き出し、入浴施設の設定、はたまた、ペットの救助など、他のだれもがやってくれない、しかし、大事なことはほとんどすべて自衛隊が行っ



炊き出しにあたる自衛隊員

ていた。亘理小学校の窓ガラスには、「自衛隊さん、ありがとう」と書かれた大きな紙が外から見てもよくわかるように張られていた。住民が心から自衛隊に感謝していることが理解できた。

終わりに

震災後の被災地で必要とされる支援は日々変化する。支援する側は、被災者側がどのような状況にあり、今なにが必要かを見極めたうえで支援行動に出ることが重要である。けが人が多数いると思いこんで亘理町にきた医療チームが、けが人の少なさに拍子抜けしてさっさと引き揚げたという話を聞いた。菓子パンも震災直後のなにも食べるものが無い状況では貴重なエネルギー源であるが、延々と続くと、むしろ病気の原因になるかもしれない。特に、震災から1か月以上も経過すると、様々な支援がそこそこ行き渡る可能性もあるので、思い込みでの行動は、被災地に恩恵をもたらさないだけでなく、時間、人材、物資の浪費につながる可能性がある。今回の亘理町の経過が、南三陸や石巻のそれと一致するかどうかはわからないが、大切なことは、今、その被災地でなにが最も求められているかを明確にして支援行動にあたることだと思われる。